

# 小学校専科制の在り方について (最終年度報告)

附属学校改革専門委員会：(代表) 田代高章\*, 菅原純也\*\*

\*岩手大学教育学部, \*\*岩手大学教育学部附属小学校

(令和4年3月14日受理)

## 1. 本研究の位置付け

本研究は、教育学部の附属学校運営会議の下に設置されている「附属学校改革専門委員会」が進める附属学校の課題に関する研究である。

岩手大学では、全学的な取り組みとして、第三期中期目標において、【17】「地域のモデル校としての附属学校の機能を強化し、先導的・実験的取組を通じた教育・研究を進め、地域の教育課題に応える」を掲げている。その下での中期計画【34】「地域のモデル校として、多様な子どもたちを受け入れ、幼稚園、小学校、中学校という異校種間の接続教育及び一貫教育の在り方や小学校の専科制について調査研究を行う。そのうえで、附属学校の機能を強化するための学級数、入学定員の適正化を図り、教員の適正配置を計画し、実施する」を設定している。

このように、上記の中期目標・中期計画に従い、地域課題の解決にも貢献しうる地域のモデル校としての役割と、地域創生のための附属学校園の機能強化を目指した取組を、学部と附属校園との共同で進めている。第3期中期目標・中期計画期間中、「附属学校改革専門委員会」が全体として所掌する課題は、具体的には、①小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発、②小学校の専科制の在り方について、③異校種間の接続教育及び一貫教育の在り方について、の三つの研究テーマである。本研究は、そのうちの②小学校の専科制の在り方に関する研究である。

なお、文部科学省では、この間、「義務教育9年間を見通した指導体制の在り方等に関する検討会議」において、令和3(2021)年7月に「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について(報告)」を取りまとめている。その中では、特に優先して取り組む教科として、外国語、理科、算数、体育を挙げている。その際、文部科学省では、「教

科担任制」という用語を使うのが一般であるが、本研究では、第3期中期目標設定当初の平成28(2016)年における研究課題として「専科制」を用語として使っており、内容的には「教科担任制」と同様として、本稿では、特定の教科に限定せず、広く「小学校専科制の在り方」として、第3期中期目標・中期計画期間6年間の最終年度におけるまとめとしての成果報告を行うものである。

(文責 田代高章)

## 2 専科制における授業編成の方策

### (1) 附属小学校における専科制編成の経緯

附属小学校では、担任の教科専門性を生かすため、自学級以外のクラスに出向いて授業を行う教科担任制の取り組みを行っている。これは、専任の教科担当教員を追加配分によって教員定数を増やした配置を行うものではなく、既存の教員定数に変更を加えることなく、現員数の中で、ある時間において他学級の特定教科の指導に教員が出向き、その代わりに当該学級の担任教員が、他学級の特定教科の指導に入るという形態を取っている。

これは、本校独自の専科制の形態であり、いわゆる「出入り」と呼んでいるこの形態の有効性や課題を明らかにしてきた。

これまでの取組により、この専科制が子どもの学びにとって、より専門的で充実した学びになることや学級経営の安定につながるということが明らかになっている。

本研究では、令和3年度の取り組みについて述べるとともに、長期にわたる専科制の研究を通して明らかになったことを元に、公立学校の運用モデルとなるような、専科制を取り入れた教育課程を構想するための手順について紹介する。このことは、岩手大学中期目標に合致することでもあり、本学の使命

でもある地域貢献にも資することであると考える。

## (2) 専科制編成の方針

次に、本校における専科制構想に関わって、大切にしている考え方を示す。

- ・教員の専門性やストロングポイントを生かす教員配置に努めること。
- ・年度による実施の重点教科を定めること。(令和3年度は、5年の理科、6年の算数、複式学級の外国語、5・6年への体育科教員の配置)
- ・学級経営や学年経営の安定と充実の観点から、担任の指導経験を優先させながら過度の負担を排除し、余裕をもった出入りとする。

## (3) 授業編成の方策

### ①基本的な考え方

「出入り」には、担任同士による交換授業、及び、担任外が入り、担任が空き時間となる玉つき授業がある。これらを組み合わせ、全学年の出入り授業計画を作成する。

### ②組み合わせのパターン

#### ア 交換授業について

交換授業とは、担任同士で授業を交換するパターンを指す。この場合、本校では、同一時間で2名または3名による交換授業を行っている。基本的には、学年内での交換授業であるが、場合によっては、学団内や学団を超えての交換授業も実施する。

例えば、1組担任が2組に、2組担任が1組に入って授業をする。

#### イ 玉突き授業について

玉突き授業とは、担任外から該当学級に入り授業を行い、担任が空き時間となるパターンを指す。例えば、担任外から1組に入り、担任が空き時間になる。

本校では、次の3パターンで実施している。

- ・1クラスに対して、担任外が入り、担任は空き時間となる。
- ・2クラスの担任と担任外による、玉つき授業。担任のどちらかが空き時間となる。
- ・3人の担任と1人の担任外による玉つき授業。1人が空き時間となる。

※これ以上の人数が関わる出入りは、人が錯綜し

ぎることや、出張等で欠員が出た場合、補充も難しい状況なるため、実施は難しい。

## (4) 授業予定表の作成手順

専科制を実現させるためには、「誰が、どの学級に、どの時間に」入るのか。人員の重なりや漏れはないかを丁寧に確認しながら作成することが肝要である。

そのためには、前述した作成方針に沿って行うとともに、可視できる資料を元にしなが、複数の目で検討しながら進めることにより、より良い専科制の人員配置となる。

次に、作成手順を述べる。

- ①教員希望調査(出る教科、入る教科の希望)
- ②特別教室の割り当て(体育館、理科室等)
- ③重点教科を遂行するための担任外の配置
- ④重点教科を遂行するための玉突き授業の構想
- ⑤配置の落ちや重なるの確認
- ⑥試験運用→本実施

The table is a complex grid representing the lesson schedule. The vertical axis (rows) lists various classes and subjects, including 1st grade, 2nd grade, 3rd grade, 4th grade, 5th grade, 6th grade, and special classes. The horizontal axis (columns) represents time slots throughout the day. The grid is filled with text indicating which teacher is assigned to which class during which time slot, demonstrating the 'exchange' and 'stone' (玉つき) teaching methods described in the text.

## 3 令和3年度による附属小学校教員の評価(詳細は別紙資料)

今年度中間(7月)及び12月に専科制についてのアンケートを行った。抜粋して紹介する。

### (1) 成果

#### ①学級経営・児童指導に関わって

- ・専科の先生方に学習指導していただいたことで、子供たちは楽しかったのではないかと思います。
- ・学級経営の安定につながっていた。教科担任制、中学校を見据えて学習環境に慣れることができていた。

- ・音楽を専門的な先生に指導していただき、朝の歌で子供たちの成長を感じた。出入りが今までで一番少なかったが、経営の安定を図ることができた。
- ・教科制によって、多くの大人で子供たちを育てているという空気があり、よいと感じます。また、自分の学級の現状についても情報交換をすることもできました。

### ②専門的な指導について

- ・高学年の教科担任制は推奨します。内容が高度ですので、専門性が高い方がよいと思います。
- ・専門的な指導を受ける意義は非常に高い。
- ・教える内容が高度になりつつある高学年は積極的に専科制を進めることに賛成です。
- ・やはり理科については、準備に時間がかかってしまうので専科制は賛成である。

### ③教師力・自己研鑽について

- ・日常的に組み込まれていることで、研究実践へのチャレンジの機会が増えることはよいと思う。後は、一人一人の心がけ次第で日常的に実践を積み重ねて行きたい。
- ・単元計画や指導法を学年で共有したことで、それぞれの専門性を生かした教科指導をすることができた。

### ④専科制の配置について

- ・1年を過ごしてみて、やはり無理のない程度に配置することが必要だと感じた。

## (2) 課題

### ①時数確保について

- ・年度当初、行事の前後は出入りが無いが、進度は保たなければならないため、空き時間がなく、大変だった。
- ・やむを得ないことではあるが、「出入り停止」のときがしばしばあり、特に算数は時数の確保が難しいと感じることもあった。

### ②教員配置について

- ・時間割によっては自分のクラスでの授業が2時間（行事が重なると1時間）の時もある。出入りと自分の授業のバランスが上手くとれるともっといいなと感じるが、調整は難しいと感じる。
- ・（難しいかもしれないが）時数の多い教科につい

ては、学級担任同士の交換がよいのかもしれない。

- ・人員不足など難しいことが多いと思うが、1対1の出入りの方が行事等の授業時数減にも対応することができる。

### ③学級経営について

- ・担任として、他学級に入る身として、他の先生に教えてもらう気持ちや心構えをしっかりと身に付けさせたいと感じます。正直、指導しにくい児童もいます。どの先生でもしっかりやるという意識をもたせることが必要なことだと思います。
- ・自分が担任なら、専門性の高い授業を受けられることの意味や専科の先生の価値、人から学ぶ意味等を話し、貴重な機会に感謝し吸収するよう、礼節、礼儀を教えます。

### ④指導しない教科に対する不安

- ・体育で考えると、このまま教科専門が進むと、全く体育指導をしたことがない教員が増え、質が下がるかもしれないという懸念もあります。
- ・他校に転勤したとき、特定の教科だけ経験値が足りない…となると辛い物もあるような気がします。
- ・専科制に任せすぎて自分がいざその教科を再びもつ時に困らないように、勉強しておかなければと思う。

## (3) 考察

今年度の反省を受けて、来年度に向けて、今年度同様、高学年を中心として行うことが望ましいと考える。その際、5年生の理科、6年生の算数を柱として考えたい。また、高学年の空き時間を4～5時間はどの学級も確保するように組んでいく。

学年を超えた出入りは時数や人員確保の面からも難しさが見られた。学年を超える場合は、三つ巴にするのではなく、担任間の授業交換の形がしっくりくると考える。学年内であれば、比較的調整が付きやすいので、三つ巴は可能であると考えられる。

## 4 中期目標期間（6年間）を通した専科制における成果と課題

## (1) 成果

### ①専門的指導と授業力の向上

専門教科の教員が指導することにより、教科の本質に迫る学びに触れ、知的欲求が満たされる。教師は、系統性を意識し、指導の手立てを明確にしたり、子供の反応に応じて臨機応変に指導をしたりすることにより、授業力の向上が認められた。また、同一場面の授業を複数回実施できる場合、資料や発問の改善を行い、質の高い授業をすることができた。

### ②生徒指導の充実

複数の教員が出入りすることにより、たくさんの目で学級・児童を見ることになり、気付かないところにも目が届くこと、児童一人一人の輝きを見出すことができることを実感している。職員室内で、気軽に情報交換できるような、場所・風土も大切な要素である。

### ③働き方改革とOJT

例えば、理科のような実験の準備に時間がかかる教科を担当することにより、負担軽減にもつながっている。担任が、専科教員と児童の情報共有を図る中で、指導方法も学ぶことができ、指導力向上にもつながっている。

## (2) 課題

### ①教師の強みを活かした配置について

本校のように、各教科領域を専門としている教員が多くいる場合、より専門的な指導を進めることができる。他方、公立校であれば、そういった体制が整っていない現状もある。その場合の、人員に配置については、学校の実情に合わせたフレキシブルな対応が必要となると推察される。専門ではない教員における専科制の推進については、これから明らかにしていく必要がある。

### ②学級経営について

多様な目で、子供をみるよさが専科制のよさではあるが、他方、そこに至るまでの学級指導についての重要性についての検討は課題が残った。

## 5 おわりに

附属小学校が取り組んできた独自の専科制である「出入り」を支える基盤は、お互いの思いやり気

遣いである。また、全てのよさを網羅しようと、全学年全学級に配置することにより、余裕のない学校運営になることが考えられる。無理せずに、学校の実態に合った専科教科、専科教員を配置し、持続可能な専科制を取ることが、公立小学校においても取り組む際の最も大切な考え方のひとつではないだろうか。(文責 菅原純也)

## 資料

### 令和3年度における専科制の成果と課題

#### 成果

##### 1 学級経営・児童指導に関わって

- 算数に出入りした。その分、体育・理科・音楽を担当していただいた。特に問題はなかったし、むしろ専科の先生方に学習指導していただいたことで、子供たちは楽しかったのではないかと思う。
- 算数のように毎日ある教科だと出入りや学級経営の面からも様々考えることはありますが。
- 学級経営の安定につながっていた。専科制、中学校を見据えて学習環境に慣れることができていた。
- 授業を通して、児童一人一人（他のクラス含む）の輝きを見出すことができた。2クラスの授業をすることで、教材への考えも深まり、児童の声もよく聞こえるようになった。
- 今年度は出入りが無かった分、自クラス経営の安定に努めることができました。自身の専門性を磨くことに関しては、学年の先生方に授業展開を毎週提案することを通して、実践を重ねてきました。また、学年の先生方も出る授業が無かったため、学級替え後の5年生にそばにいる時間が多くとることができました。それが結果的に学年の安定につながったと感じます。さらに、理科を井面先生が授業準備を丁寧に行って下さっているおかげで、子供たちも意欲的に臨んでいます。
- 今年度は、自分が出ることはありませんでした。

自クラスの安定に努めることができました。

○今回初めて出入りがなかったが、子供たちと常にいることで見えてくるものも多かった。専科制についてはどんどん進めていった方が、子供たちにとってもいいと思う。

○音楽を専門的な先生に指導していただき、朝の歌で子供たちの成長を感じた。出入りが今までで一番少なかったが、経営の安定を図ることができた。

○低学年で出入りがなかったため、学級の子供達とたっぷり時間し、安定した経営ができたと考える。

○高学年は、専科制にすることで、専門の先生が中学校との接続を考えた授業の構成を実現できると考えるため、有効であると思う。

○教科制によって、多くの大人で子供たちを育てているという空気があり、よいと感じます。また、自分の学級の現状についても情報交換をすることもできました。

○音楽と社会に入ってくくださったことで、学級が落ち着いて学ぶ環境を支えていただきました。他学級との調整が入ることも多く、忙しい中で対応していただけて、入っていただく者としてはありがたかったです。(入ってくださる先生方は大変そうでした。)

○高学年の専科制はとても効果があると感じるし、子供たちも出入りの時間を楽しみにしている。

○学級経営の役に立てているかは疑問であるが、担任と情報交換を密にすることで、児童の見取りが多面的にでき、声のかけ方にも工夫ができる。

## 2 専門的な指導について

○高学年の専科制は推奨します。内容が高度ですので、専門性が高い方がよいと思います。

○専門的な指導を受ける意義は非常に高い。

○教える内容が高度になりつつある高学年は積極的に専科制を進めることに賛成です。

○理科に入っていた。専門的な指導だけでなく、やはり理科については、準備に時間がかかってしまうので専科制は賛成である。

○理科では高学年で実験等多くなるため専科をおくことはいいなと思いました。算数では大切な見方・考え方は低・中で特に育まれていくと思うた

め2～4年生での算数専科もありなのではないかと思いました。

○中学との接続の観点だけでなく、教材研究に当たる時間の確保にもつながる良い取り組みだと思います。

○教員の専門性を生かした授業が展開されることで、各教科の資質・能力の育成に向け、高学年の専科制が効果的に働いていたと考える。

## 3 教師力・自己研鑽について

○日常的に組み込まれていることで、研究実践へのチャレンジの機会が増えることはよいと思う。後は、一人一人の心がけ次第で日常的に実践を積み重ねて行きたい。

○単元計画や指導法を学年で共有したことで、それぞれの専門性を生かした教科指導をすることができた。

○去年と同じ教科を持たせていただいたことで学年のつながりを意識しながら指導にあたることができました。

○自身の専門性を磨く上でも他学級の教科持たせていただける機会がありがたかったし、代わりに入っていただく先生に自クラスを客観的に見ていただくこともありがたかったです。一つの教科に絞って担当させていただき、自分の専門性を磨く大切さと難しさを感じている。

## 4 専科制の配置について

○1年を過ごしてみて、やはり無理のない程度に配置することが必要だと感じた。

○専科制は、学級経営の安定を第1としながら推進したい。出入りによって、生徒指導問題の対応が不十分とならないよう、1日における出入り時間のバランス調整が必要である。また、学年内での出入りによって学年担任団の児童把握につながるというメリットも生かしたい。最大限に教員を動かすと突発的な状況(担任の欠勤等)に対応しにくくなるため、人的なゆとりを考えた上で配置した方がよい。

## 課題

### 1 時数確保について

▲行事が入ると、3人がかかわるところは時数の確保が大変になるときがあったが、特に高学年で専科制をとることはいいと思う。

▲年度当初、行事の前後は出入りがないが、進度は保たなければならないため、空き時間がなく、大変だった。

▲やむを得ないことではあるが、「出入り停止」のときがしばしばあり、特に算数は時数の確保が難しいと感じることもあった。

## 2 教員配置について

▲時間割によっては自分のクラスでの授業が2時間（行事が重なると1時間）の時もある。出入りと自分の授業のバランスが上手くとれるともっといいなと感じるが、調整は難しいと感じる。

▲（難しいかもしれないが）時数の多い教科については、学級担任同士の交換がよいのかもしれない。

▲人員不足など難しいことが多いと思うが、1対1の出入りの方が行事等の授業時数減にも対応することができる。

## 3 学級経営について

▲担任として、他学級に入る身として、他の先生に教えてもらう気持ちや心構えをしっかりと身に付けさせたいと感じます。正直、指導しにくい児童もいます。どの先生でもしっかりやるという意識をもたせることが今の附属小学校に必要なことだと思います。

▲自分が担任なら、専門性の高い授業を受けられることの意味や専科の先生の価値、人から学ぶ意味等を話し、貴重な機会に感謝し吸収するよう、礼節、礼儀を教えます。小学生は、親の目（担任の目）が大きく影響するため、環境によって態度が変わります。教科書、筆記用具、楽器等、持ち物の確認や対応まで専科がするのは違うのではないのでしょうか。空き時間の確保の意味もあと周知しているが、物や気持ちの準備、心構えなく通年の専科の授業は成り立ちません。また、教室移動の仕方、対話やグループ活動など、学級経営の基盤のもとに専科が成り立っていることも、忘れずにいたいです。

## 4 指導しない教科に対する不安

▲専門性を生かした指導は、教員も児童も力を伸ばすことができると感じます。ただ、体育で考えると、このまま教科専門が進むと、全く体育指導をしたことがない教員が増え、質が下がるかもしれないという懸念もあります。

▲他校に転勤したとき、特定の教科だけ経験値が足りない…となると辛い物もあるような気がします。

▲専科制に任せすぎて自分がいざその教科を再びもつ時に困らないように、勉強しておかなければと思う。